4
エリシャ
聖徒伝 128

「神の怒りからの究極の救いを」

列王記第二　6～7章　　**エリシャのたたかい**

Shikaoichurch.com

アウトライン

０. イントロダクション

Ⅰ. 証しを聞くヨラム王　8章1～6節

Ⅱ. ハザエルの即位　8章7～15節

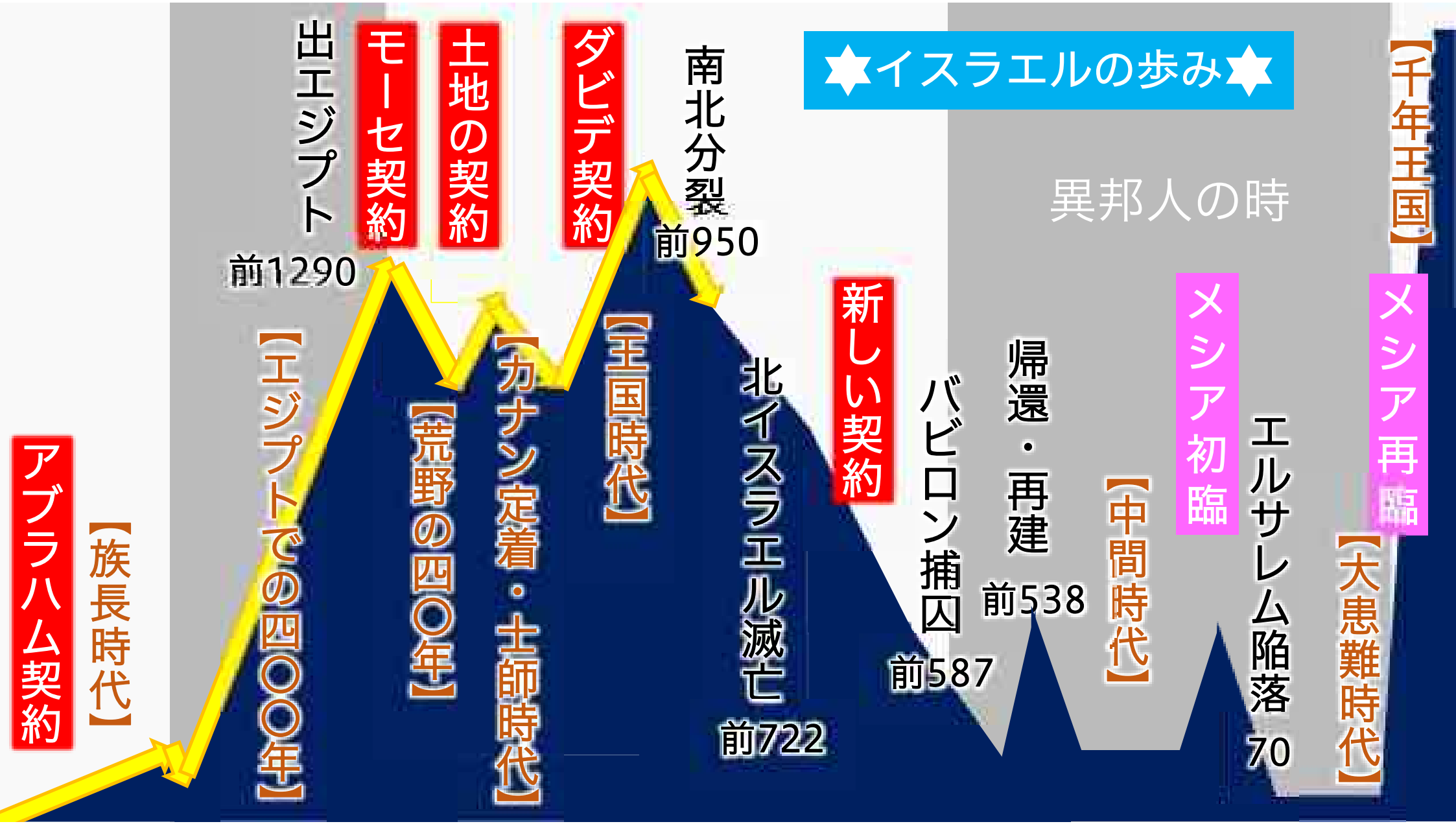
Ⅲ. 南のヨラムとアハズヤ　8章16～29節

Ⅳ. エフーの謀反・イゼベルの死　9章

Ⅴ. まとめと適用

罪と死の贖いの十字架を見上げよう

【無垢の時代】
天地創造
【良心の時代】
堕罪
~大洪水
【人類統治の時代】
バベルの塔事件
【約束の時代】
アブラハム
～ヤコブ
【律法の時代】
イスラエル
王国時代
メシア初臨
【恵みの時代】
聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨
【御国の時代】
千年王国
大審判
新天新地
①エデン契約
②アダム契約
③ノア契約
④アブラハム契約
⑤モーセ契約
⑥土地の契約
⑦ダビデ契約
⑧新しい契約
どの時代も
神の約束が礎にある
過　去
現　在
未　来


イスラエルの歩み
アブラハム契約
【族長時代】
【エジプトでの四〇〇年】
出エジプト
前1290
モーセ契約
土地の契約
【荒野の四〇年】
【カナン定着・士師時代】
ダビデ契約
【王国時代】
南北分裂
前950
北イスラエル滅亡
前722
新しい契約
バビロン捕囚
前587
帰還・再建
前538
【中間時代】
異邦人の時
メシア初臨
エルサレム陥落
70
【大患難時代】
メシア再臨
【千年王国】

列王記（第一～第二）

第一	1～11章	**ソロモン**王の治世 神殿建築	イスラエル（統一王国）
第一	12～16章	**王国の分裂**	
第一	17～22章	預言者**エリヤ** （アハブ王の生涯）	
第二	1～2章		
第二	2～13章	預言者**エリシャ**	
第二	14～17章	**二つの王国**の歴史 北王国滅亡まで	
第二	18～25章	**ユダ王国**の歴史 滅亡まで	

ユダ（南王国）

レハブアム
アビヤム
アサ
ヨシャパテ
ヨラム
アハズヤ
アタルヤ
ヨアシュ
アマツヤ
ウジヤ
ヨタム
アハズ
ヒゼキヤ
マナセ
アモン
ヨシヤ
エホアハズ
エホヤキム
エホヤキン
ゼデキヤ

オバデヤ
ヨエル
イザヤ
ミカ
エレミヤ
エゼキエル

イスラエル（北王国）

ヤロブアム…ナダブ
バアシャ…エラ
ジムリ
オムリ…オムリ…**アハブ**
…アハズヤ…ヨラム
エフー…エホアハズ
…ヨアシュ
…ヤロブアムⅡ
…ゼカリヤ
シャルム　メナヘム
ペカフヤ　ペカ
ホセア

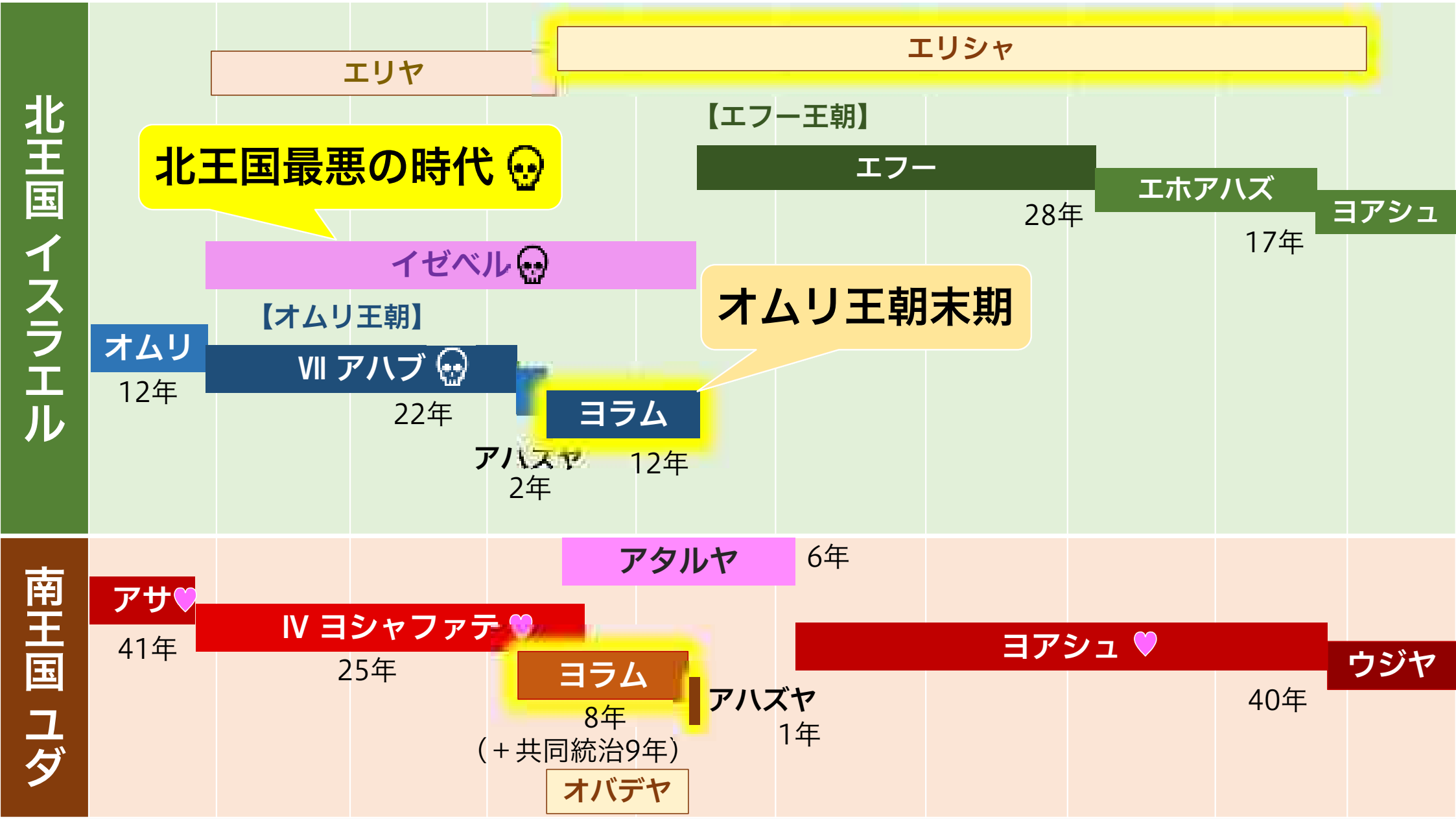
エリヤ
エリシャ
アモス
ヨナ
ホセア

★北王国は10王朝に19人の王
★南王国は1王朝に20人の王

	ユダ（南王国）	南の預言者たち	北の預言者たち	イスラエル（北王国）
BC933	レハブアム アビヤム アサ			★ヤロブアム…ナダブ
	ヨシャパテ ヨラム	オバデヤ	エリヤ エリシャ	★バアシャ…エラ ★ジムリ　★オムリ …アハブ　…アハズヤ …ヨラム
BC850	アハズヤ　アタルヤ			
	ヨアシュ アマツヤ	ヨエル		★エフー …エホアハズ …ヨアシュ
BC800	ウジヤ（アザルヤ） ヨタム アハズ	イザヤ ミカ	アモス ヨナ ホセア	…ヤロブアムⅡ …ゼカリヤ　★シャルム ★メナヘム　…ベカフヤ ★ベカ
BC700	ヒゼキヤ			★ホセア
BC722	マナセ アモン	ナホム		アッシリア捕囚　BC722
	ヨシヤ	ゼパニヤ　エレミヤ　ハバクク		
BC600	エホアハズ エホヤキム エホヤキン ゼデキヤ	エゼキエル		

★北王国は10王朝に19人の王

★南王国は1王朝に20人の王
神に従う**善王は8人**


北王国 イスラエル
エリヤ
エリシャ
【エフー王朝】
北王国最悪の時代
エフー
28年
エホアハズ
ヨアシュ
17年
イゼベル
オムリ王朝末期
【オムリ王朝】
オムリ
12年
Ⅶ アハブ
22年
ヨラム
12年
アハズヤ
2年
南王国 ユダ
アタルヤ
6年
アサ
41年
Ⅳ ヨシャファテ
25年
ヨアシュ
40年
ウジヤ
ヨラム
8年
(＋共同統治9年)
アハズヤ
1年
オバデヤ

【エリヤとエリシャ】 II 列王記

- 孤独な預言者エリヤは、残れる信仰者たちと出会い、後継者**エリシャ**を得た。

- エリヤが組織した預言者学校で**エリシャ**も学び、エリヤの携挙後、正式に後継者に。

- **エリシャ**と残れる信仰者ゆえ、イスラエルは主に守られていた。大飢饉の最中のアラムによる包囲。滅亡の危機から、主ご自身が、イスラエルを助け出された。

Ⅰ．証しを聞くヨラム王　　列王記第二 8章1～6節

ヨルダン川

【シュネムの女と大飢饉の警告】 Ⅱ列王記8:1～2

エリシャは、かつて子どもを生き返らせてやったあの女に言った。「あなたは家族の者たちと一緒にここを去り、とどまりたいところに、しばらく寄留していなさい。【主】が飢饉を起こされたので、この国は七年間、飢えに見舞われるから。」 この女は神の人のことばにしたがって出発し、家族を連れてペリシテ人の地に行き、七年間滞在した。

■7章の大飢饉の前に時はさかのぼる。シュネムの女は、エリシャの警告に従い、国外へ逃れていた。

➡主を信じる女は、最悪の危機を免れた。

【ヨラム王とゲハジ】 Ⅱ列王記8:3～4

七年たった後、彼女はペリシテ人の地から戻って来て、自分の家と畑を得ようと王に訴え出た。

そのころ*、王は神の人に仕える若者ゲハジに、「エリシャが行った大いなるわざを、残らず私に聞かせてくれ」と話していた。

＊7章・大飢饉と敵の包囲からのサマリア解放後。

■不信仰の王が、エリシャの弟子に話を聞くなどありえない。劇的な解放後に、心が緩んだ？

➡4人のツァラアト患者の一人がゲハジ？

よい知らせの褒美を得、王に謁見した？

【シュネムの女】 II 列王記8:5～6

彼が王に、死人を生き返らせたあの出来事を話していると、ちょうどそこに*、子どもを生き返らせてもらった女が、自分の家と畑のことについて王に訴えに来た*。ゲハジは言った。「王様、これがその女です。そしてこれが、エリシャが生き返らせた子どもです。」

＊まさに神のタイミングで!!

＊律法に従えば、放棄され、他者の所有となった地も、7年目には、解放されるべき。（申命記15:1）

➡不信仰な王が律法の規定を守るのか？

【王の命令】 II 列王記8:6

王が彼女に尋ねると、彼女は王にそのことを話した。すると王は彼女のために、一人の宦官*に「彼女のすべての物と、彼女がこの地を離れた日から今日までの畑の収穫のすべてを、返してやりなさい」と命じた*のであった。

＊なぜ宦官が？ 偶像崇拝のイスラエルゆえに。

＊神のタイミングで、ありえないことが起こった。

■主が、信じる者を災厄から逃れさせ、
約束された土地をも確かに守られた。

**エリシャの証しに
ヨラム王は
どう応答したのか？**

Ⅱ．ハザエルの即位　　列王記第二 8章7～15節

列王記第一19:15～17

【主】は彼に言われた。「さあ、ダマスコの荒野へ帰って行け。そこに行き、**ハザエル**に油を注いで、アラムの王とせよ。

また、ニムシの子**エフー**に油を注いで、イスラエルの王とせよ。また、アベル・メホラ出身のシャファテの子**エリシャ**に油を注いで、あなたに代わる預言者とせよ。

ハザエルの剣を逃れる者をエフーが殺し、エフーの剣を逃れる者をエリシャが殺す。」

エリヤの全権を継いだエリシャが、この預言を実現させていく

【アラム王とエリシャ】 Ⅱ列王記8:7～8

さて、エリシャがダマスコに行ったとき、アラムの王ベン・ハダド*は病気であった。すると彼に「神の人*がここまで来ている」という知らせがあった。

王はハザエルに言った。「贈り物を持って行って、神の人を迎え、私のこの病気が治るかどうか、あの人を通して【主】のみこころを求めてくれ。」

＊ベン・ハダド２世　…アハブ、アハズヤ、ヨラム三代にわたり、イスラエルを苦しめた。

➡老年のアラム王が信頼した将が、ナアマン。

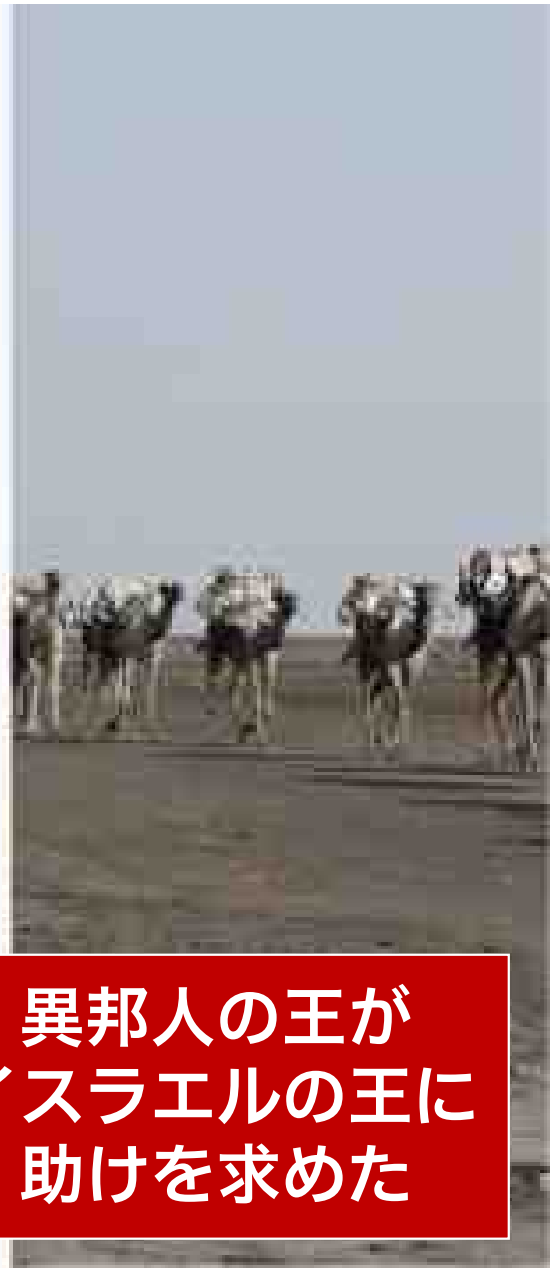
＊エリシャがダマスコまで来ていた。

【王の問い】 II 列王記8:9～10

そこで、ハザエルはダマスコのあらゆる良い物をらくだ四十頭に載せて、贈り物として携え、神の人を迎えに行った。彼は神の人の前に来て立ち、こう言った。「あなたの子、アラムの王ベン・ハダドが、『この病気は治るであろうか*』と言って、あなたのところへ私を遣わしました。」

エリシャは彼に言った。「行って、『あなたは必ず治る』と彼に告げなさい。しかし、【主】は私に、彼が必ず死ぬことも示された。」

＊癒やされたナアマンのことが頭にあった？



異邦人の王が
イスラエルの王に
助けを求めた

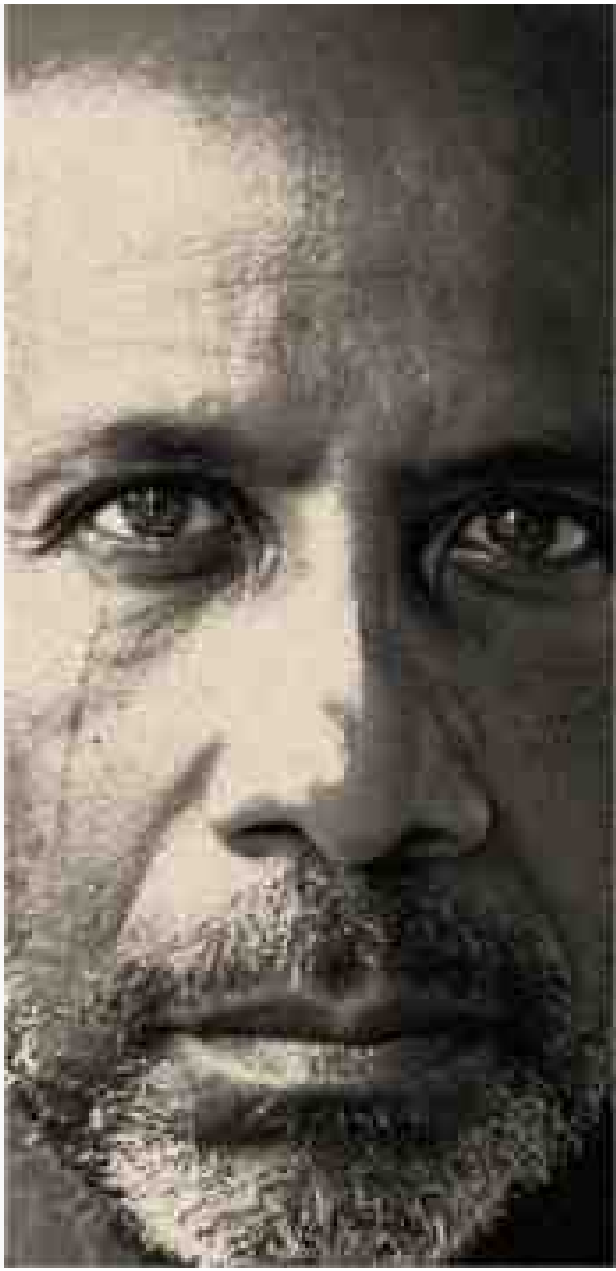
【エリシャの涙】 II 列王記8:11

神の人は、彼が恥じるほどじっと彼を見つめ、そして泣き出した*ので、

ハザエルは尋ねた。「ご主人様はなぜ泣くのですか。」エリシャは答えた。「私は、あなたがイスラエル人に害を加えようとしていることを知っているからだ。あなたはイスラエル人の要塞に火を放ち、その若い男たちを剣で切り殺し、幼子たちを八つ裂きにし、妊婦たちを切り裂くだろう。」

＊ハザエルによる将来の惨劇を見ていたエリシャ。

➡40年後のエルサレムの悲劇を見て泣いたメシア。



【ハザエルへの預言】 Ⅱ列王記8:13

ハザエルは言った。「しもべは犬にすぎないのに*、どうして、そんな大それたことができるでしょう。」しかし、エリシャは言った。「【主】は私に、あなたがアラムの王になる*と示されたのだ。」

＊謙遜？

➡ハザエルは、直後に王暗殺を実行。
野心と残虐な性質は元来のもの。

＊エリヤへの主の預言が、このタイミングでエリシャから伝えられた。

【ベン・ハダドの死】 Ⅱ列王記8:14～15

彼はエリシャのもとを去り、自分の主君のところに帰った。王が彼に、「エリシャはあなたに何と言ったか」と尋ねると、彼は「あなたは必ず治ると言いました」と答えた。

しかし、翌日、ハザエルは厚い布を取って水に浸し、王の顔にかぶせたので、王は死んだ。こうして、ハザエルは彼に代わって王となった。

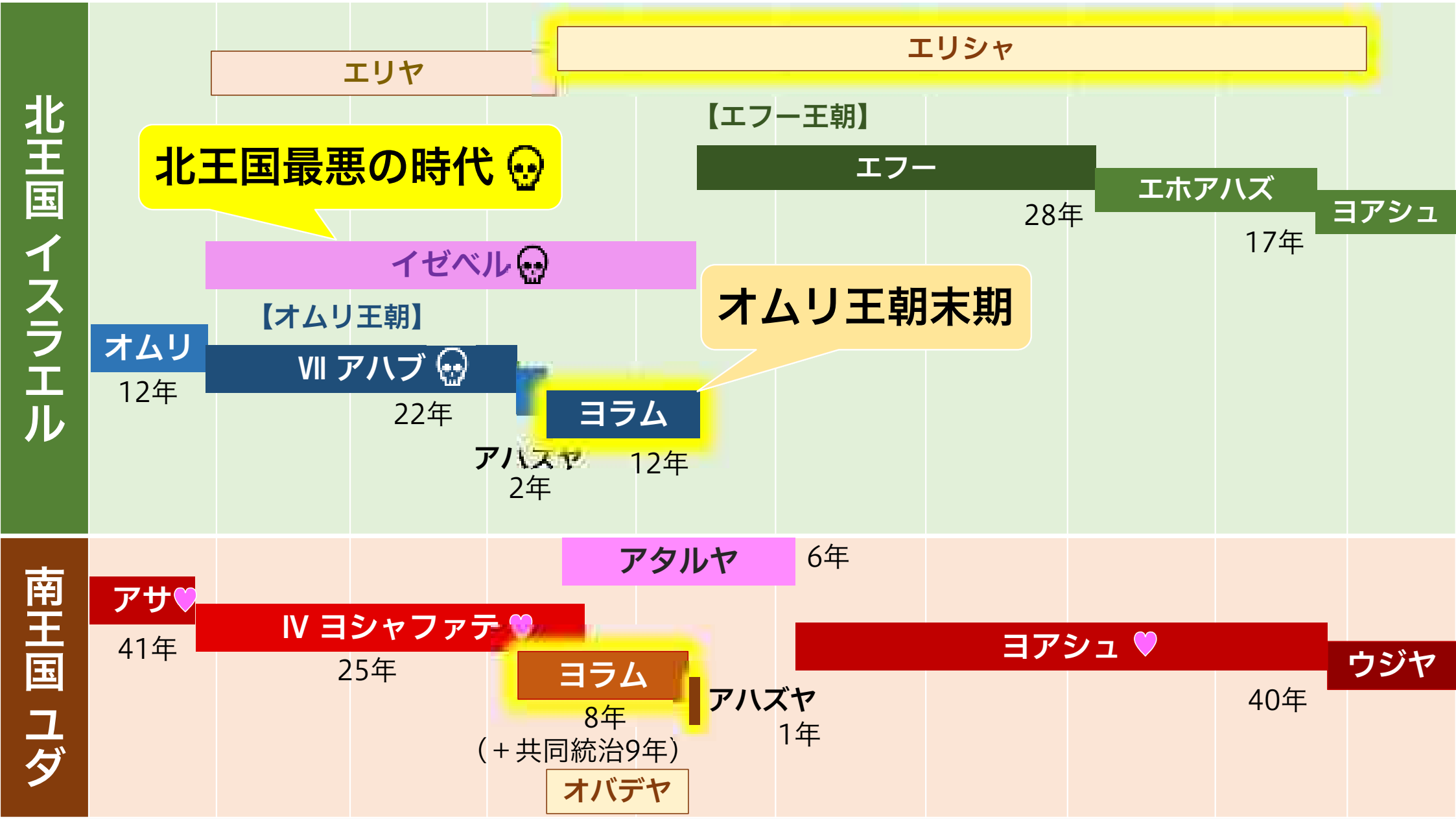
死をもっての
罪の刈り取りも
ベン・ハダドは
主を信じて
救われた!!

■主の預言は100％成就する。「必ず治る」とは？

➡アブラハムへの約束は、神の国で完全に成就。

➡この世で未成就なことは、神の国で成就する。

III．南のヨエル王とアハズヤ王　列王記第二 8章16～29節


北王国 イスラエル
エリヤ
エリシャ
【エフー王朝】
北王国最悪の時代
エフー
28年
エホアハズ
ヨアシュ
17年
イゼベル
オムリ王朝末期
【オムリ王朝】
オムリ
12年
Ⅶ アハブ
22年
ヨラム
12年
アハズヤ
2年
南王国 ユダ
アタルヤ
6年
アサ
41年
Ⅳ ヨシャファテ
25年
ヨアシュ
40年
ウジヤ
ヨラム
8年
(＋共同統治9年)
アハズヤ
1年
オバデヤ

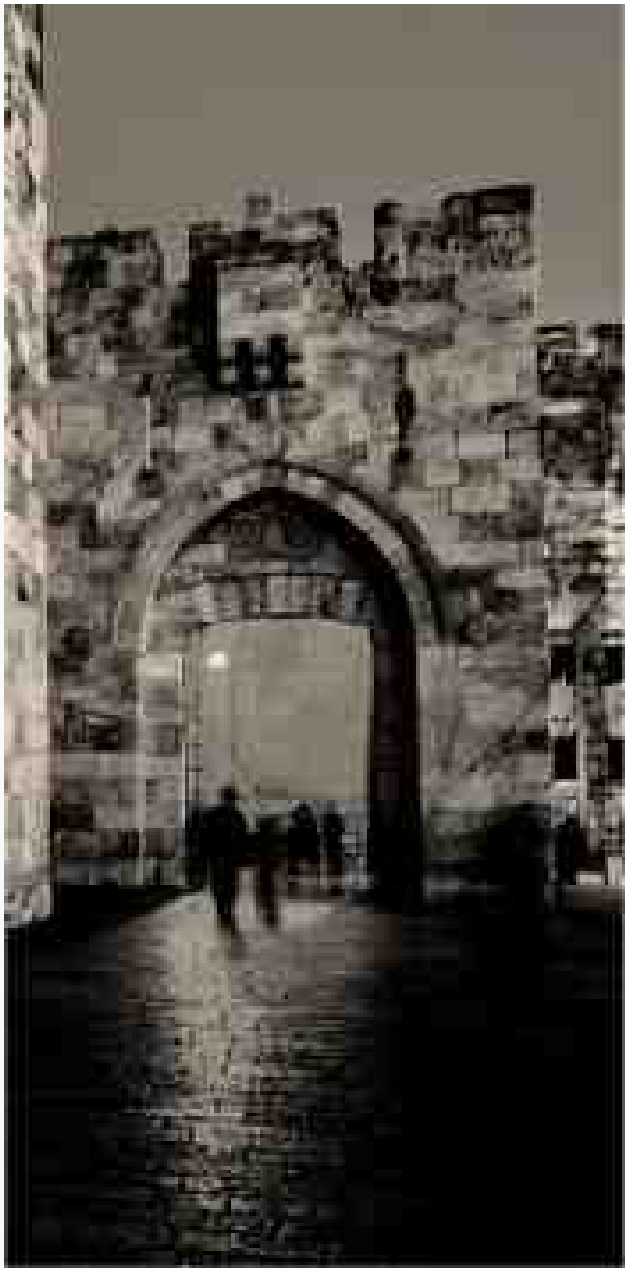
南5 ヨラム王　II 列王記8:16～17

イスラエルの王アハブの子ヨラムの第五年、ヨシャファテがまだユダの王であったとき*、ユダの王ヨシャファテの子ヨラム* が王として治めるようになった。 彼は三十二歳で王となり、エルサレムで八年間、王であった。

＊移行期間の共同統治

＊“ヤハウェは高貴な方”

■善王ヨシャファテが父だったが、行き過ぎた親北政策で北王国のアハブとイゼベルの娘アタルヤを妻にめとった。



南5 ヨラム王　妻アタルヤ Ⅱ列王記8:18～19

彼はアハブの家の者がしたように、イスラエルの王たちの道に歩んだ*。アハブの娘が彼の妻だったからである。彼は【主】の目に悪であることを行った*。 しかし、 【主】はそのしもべダビデに免じて、ユダを滅ぼすことを望まれなかった。主はダビデとその子孫に常にともしびを与えると彼に約束されたから*である。

＊南の王だが、北王国の罪を道を歩んだ。

＊ダビデ契約のゆえ、王の系譜を守られて続ける南王国・ユダ。

南5 ヨラム王　エドム Ⅱ列王記8:20～22

ヨラムの時代に、エドム*が背いてユダの支配から脱し、自分たちの上に王を立てた。

ヨラムは、すべての戦車を率いてツァイルへ渡って行き、夜襲を試みて、彼を包囲していたエドムと戦車隊長たちを討った。ところが、ヨラムの兵たちは自分たちの天幕に逃げ帰った。

エドムは背いてユダの支配から脱した。今日もそうである。リブナ*もそのときに背こうとした。

＊エサウの子孫。ヨシャファテ時代は属国。

＊荒野の一族

南5 ヨラム王　ヨラムの死 II 列王記8:23～24

ヨラムについてのその他の事柄、彼が行ったすべてのこと、それは『ユダの王の歴代誌』に確かに記されている。

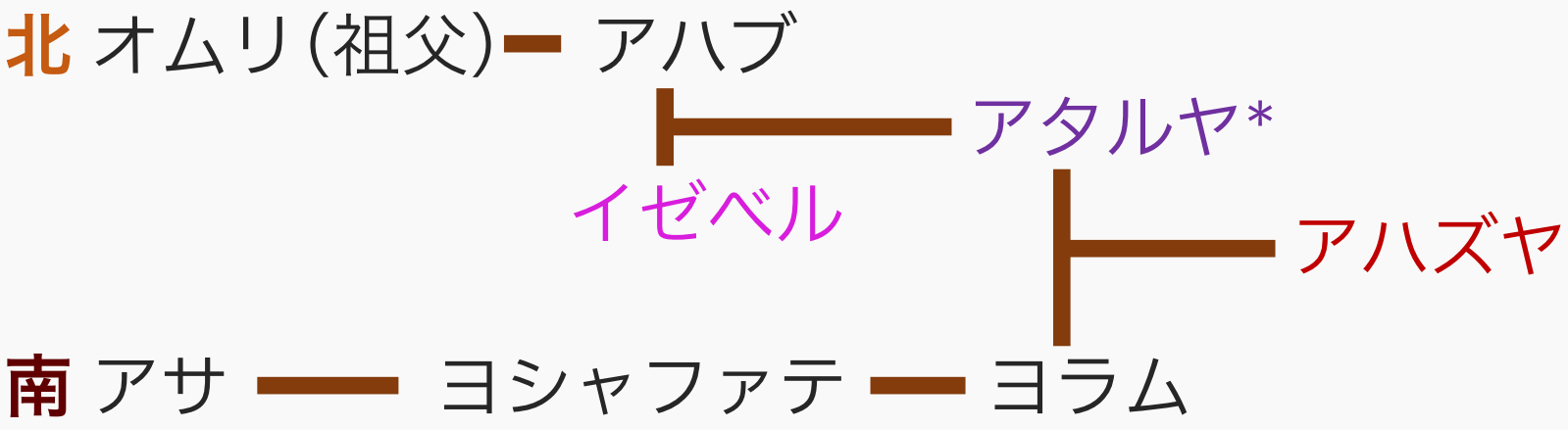
ヨラムは先祖とともに眠りにつき、先祖とともにダビデの町に葬られた。彼の子アハズヤ*が代わって王となった。

＊“ヤハウェが握られる”

南6 アハズヤ王 アタルヤ II 列王記8:25～26

イスラエルの王アハブの子ヨラムの第十二年に、ユダの王ヨラムの子アハズヤが王となった。

アハズヤは二十二歳で王となり、エルサレムで一年間、王であった。彼の母の名はアタルヤ*といい、イスラエルの王オムリの孫娘であった。



南6 アハズヤ王 アハブの家 Ⅱ列王記8:27～28

彼はアハブの家の道に歩み、アハブの家に倣って*【主】の目の前に悪であることを行った。彼自身、アハブ家の婿だったからである。

彼はアハブの子ヨラムとともに、アラムの王ハザエルと戦うため、ラモテ・ギルアデに行った。アラム人はヨラムを討った。

＊18節と同じ記述の繰り返し。強調!!

➡北王国の悪が、南王国を侵した。

■南北連合軍は、エリシャが預言したアラム王ハザエルに敗退した。

南6 アハズヤ王 ヨラムの見舞い II 列王記8:29

ヨラム王は、アラムの王ハザエルと戦ったときにラマでアラム人に負わされた傷を癒やすため、イズレエル*に帰った。ユダの王ヨラムの子アハズヤは、アハブの子ヨラムが弱っていたので、彼を見舞いにイズレエルに下って行った。

＊アハブ王が立てた宮殿があった。

■南のアハズヤ王と北のヨラム王は従兄弟同士。
アラムに戦いを挑んだがハザエルに撃退された。
➡こうして神の裁きの時が満ちることに!!

Ⅳ．エフーの反乱・イゼベルの死　列王記第二 9章

【エフー】 Ⅱ列王記9:1～3

預言者エリシャは預言者の仲間たちの一人を呼んで言った。「腰に帯を締め、手にこの油の壺を持って、ラモテ・ギルアデに行きなさい。

そこに行ったら、ニムシの子ヨシャファテの子エフーを見つけなさい。家に入って、その同僚たちの中から彼を立たせ、奥の間に連れて行き、油の壺を取って、彼の頭の上に油を注いで言いなさい。『【主】はこう言われる。わたしはあなたに油を注いでイスラエルの王とする。』それから、戸を開け、ぐずぐずしていないで逃げなさい*。」

＊凶暴で狡猾なエフー。猛獣扱いの警告。

【エフーのもとへ】 II 列王記9:4～5

その若者、預言者に仕える若者は、ラモテ・ギルアデに行った。 彼が来てみると、ちょうど、軍の高官たちが会議中であった。彼は言った。「隊長、申し上げることがございます。」エフーは言った。「このわれわれのうちのだれにか。」若者は「隊長、あなたにです」と答えた。

【エフーへの油注ぎ】 Ⅱ列王記9:6～7

エフーは立って、家に入った。そこで若者は油をエフーの頭に注いで言った。「イスラエルの神、【主】はこう言われる。『わたしはあなたに油を注いで、【主】の民イスラエルの王とする。

あなたは、主君アハブの家の者を打ち殺さなければならない。こうしてわたしは、わたしのしもべである預言者たちの血、イゼベルによって流された　すべての【主】のしもべたちの血の復讐*をする。」

＊血を流した者は、自らの血を流すこととなる。

■イゼベルが迎えるのは、悪に対する厳しい報い。

【滅びの宣告】 Ⅱ列王記9:8～9

「それでアハブの家はことごとく滅び失せる*。
わたしは、イスラエルの中の、アハブに属する
小童から奴隷や自由の者に至るまでを絶ち滅ぼし、
アハブの家をネバテの子ヤロブアムの家のように、
またアヒヤの子バアシャの家のようにする。」

＊完全に立ち滅ぼされ、聖絶されるアハブの家。

➡神の裁きの時は満ちた。誰も逃れられない。

■罪を重ねた歴代の北王国の王朝、
ヤロブアム王朝、バアシャ王朝に引き続き、
オムリ王朝も滅びることに。

【イゼベルの最期の宣告】 Ⅱ列王記9:10～11

「犬がイズレエルの地所でイゼベルを食らい、彼女を葬る者はだれもいない。』」こう言って、彼は戸を開けて逃げた。

エフーが彼の主君の家来たちのところに出て来ると、一人が彼に尋ねた。「何事もなかったのですか。あの気のふれた者は何のために来たのですか。」すると、エフーは彼らに答えた。「あなたたちは、あの男も、あの男の言ったこともよく知っているはずだ*。」

＊盗み聞きしている内通者がいないか？

疑い深いエフーの正確が読み取れる。

【エフーは王である】 Ⅱ列王記9:12～13

彼らは言った。「嘘でしょう*。われわれに教えてください。」そこで、彼は答えた。「あの男は私にこんなことを言った。『【主】はこう言われる。わたしはあなたに油を注いで、イスラエルの王とする』と。」

すると、彼らはみな大急ぎで*自分の上着を脱ぎ、入り口の階段にいた彼の足もとに敷き、角笛を吹き鳴らして、「エフーは王である」と言った。

＊“まさか、裏切り者などいません。”

➡エフーの支配力、統率力の現れ。

＊瞬く間に、王の支配を確立したエフー。

【ヨラム王への謀反】 Ⅱ列王記9:14～15

こうして、ニムシの子ヨシャファテの子エフーは、ヨラムに対して謀反を起こした。先にヨラムはイスラエル全軍を率いて、ラモテ・ギルアデでアラムの王ハザエルを防いだが、ヨラム王は、アラムの王ハザエルと戦ったときにアラム人に負わされた傷を癒やすため、イズレエルに帰っていたのである。
エフーは言った。「もし、これがあなたたちの本心であるなら、だれもこの町から逃れ出て、イズレエルに知らせに行ってはならない*。」

＊ヨラム王を不意打ちするため、情報統制を徹底。

【イズレエルへ】 II 列王記9:16～17

それからエフーは車に乗ってイズレエルへ行った。ヨラムがそこで床についていて、ユダの王アハズヤもヨラムを見舞いに下っていたからである。

イズレエルのやぐらの上に、一人の見張りが立っていたが、エフーの軍勢がやって来るのを見て、「軍勢が見える*」と言った。ヨラムは、「騎兵一人を選んで彼らを迎えに送り、元気かどうか*尋ねさせなさい」と言った。

＊広大なイズエレル平原。軍勢は、はるか遠方。

＊ハ・シャローム　「“平和、無事、安全”か？」

【止まらない軍勢】 Ⅱ列王記9:18～19

そこで、騎兵は彼を迎えに行き、こう言った。「王が、元気かどうか(ハシャローム)尋ねておられます。」エフーは言った。「元気かどうか、おまえの知ったことではない。私のうしろについて来い。」一方、見張りは報告して言った。「使者は彼らのところに着きましたが、帰って来ません。」

そこでヨラムは、もう一人の騎兵を送った。彼は彼らのところに行って言った。「王が、元気かどうか尋ねておられます。」すると、エフーは言った。「元気かどうか、おまえの知ったことではない。私のうしろについて来い。」

【ナボテの土地で】 II 列王記9:20～21

見張りはまた報告した。「あれは彼らのところに着きましたが、帰って来ません。しかし、車の御し方は、ニムシの子エフーの御し方に似ています。狂ったように御しています*。」

ヨラムは「馬をつけよ」と命じた。馬が戦車につけられると、イスラエルの王ヨラムとユダの王アハズヤは、それぞれ自分の戦車に乗って出て行った。彼らはエフーを迎えに出て行き、イズレエル人ナボテの所有地*で彼に出会った。

＊エフーの獰猛さは、よく知られていたのだろう。

＊アハブが信仰者ナボテを殺して得た土地

【ヨラムの死】 Ⅱ列王記9:22～24

ヨラムはエフーを見ると、「エフー、元気か」と尋ねた。エフーは答えた。
「何が元気か。あなたの母イゼベルの姦淫と呪術*が盛んに行われているのに。」

それでヨラムは手綱を返して逃げ、アハズヤに　「裏切りだ、アハズヤ」と叫んだ。

エフーは力いっぱい弓を引き絞り、ヨラムの胸を射た。矢は彼の心臓を射抜いたので、彼は戦車の中に崩れ落ちた。

＊イゼベルこそオムリ王朝の悪の元凶。

【エリヤの預言】 II 列王記9:25～26

エフーは侍従のビデカルに命じた。「彼を運んで、イズレエル人ナボテの所有地であった畑に投げ捨てよ。思い起こすがよい。私とあなたが馬に乗って彼の父アハブの後に並んで従って行ったときに*、【主】が彼についてこの宣告を下されたことを。

『わたしは、昨日、ナボテの血とその子たちの血を確かに見届けた――【主】のことば――。わたしは、この地所であなたに報復する――【主】のことば。』それで今、彼を運んで、【主】が語られたとおり、あの地所に彼を投げ捨てよ。」

＊エリヤの預言をアハブ王の傍らで聞いていた。

【】　Ⅱ列王記9:27～28

ユダの王アハズヤはこれを見ると、ベテ・ハ・ガン*の道へ逃げた。エフーはその後を追いかけて、「あいつも討ち取れ」と叫んだので、彼らはイブレアム*のそばのグルの坂道*で、車の上の彼に傷を負わせた。それでも彼はメギドに逃げたが、そこで死んだ。

彼の家来たちは彼を車に乗せて、エルサレムに運び、ダビデの町の彼の墓に先祖とともに葬った。

＊“習わしの家”　…偶像の祭壇があったか？

＊“猛烈な、熱烈な、むさぼるような”

＊“若獅子の坂”

ヨラムの熱烈な信奉者アハズヤも死んだ

【イゼベル】 II 列王記9:29～30

アハズヤはアハブの子ヨラムの第十一年に、ユダの王となっていた。

エフーがイズレエルに来たとき、イゼベルはこれを聞いて、目の縁を塗り、髪を結い直して*、窓から見下ろしていた*。

＊入念に化粧を施していたイゼベル

➡最期まで自分を誇示。強烈な自己顕示欲。

＊主が油注がれた王を見下す。不信仰と傲慢。

精神的優位性を保とうとする支配欲の強さ。

【イゼベルの呪い】 II 列王記9:31

エフーが門に入って来たので、彼女は「お元気ですか*。主君殺しのジムリ*」と言った。

＊ハ・シャローム

＊ジムリ　…エラを殺して即位、7日天下に終わる。
ジムリを殺して王となったのがアハブの父オムリ。

■イゼベルは、エフーもジムリ同様の運命になると呪っている。この期に及んで一方も引かない。悔い改めどころか、命乞いもしない。最期まで相手を見下し、呪う。➡悪の極めつけの姿。

【イゼベルの死】 Ⅱ列王記9:32～33

彼は窓を見上げて、「だれか私にくみする者はいないか。だれかいないか」と言った。二、三人の宦官*が彼を見下ろしていたので、

彼が「その女を突き落とせ」と言うと、彼らは彼女を突き落とし*、彼女の血が壁や馬にはねかかった。エフーは彼女を踏みつけた*。

＊偶像礼拝者の宦官

＊高慢なイゼベルには、これ以上ない屈辱的な死。

■エフーは、イゼベルの挑発を相手にせず、
高みから突き落とし、踏みつけた。

【イゼベルの亡骸】 II 列王記9:34～36

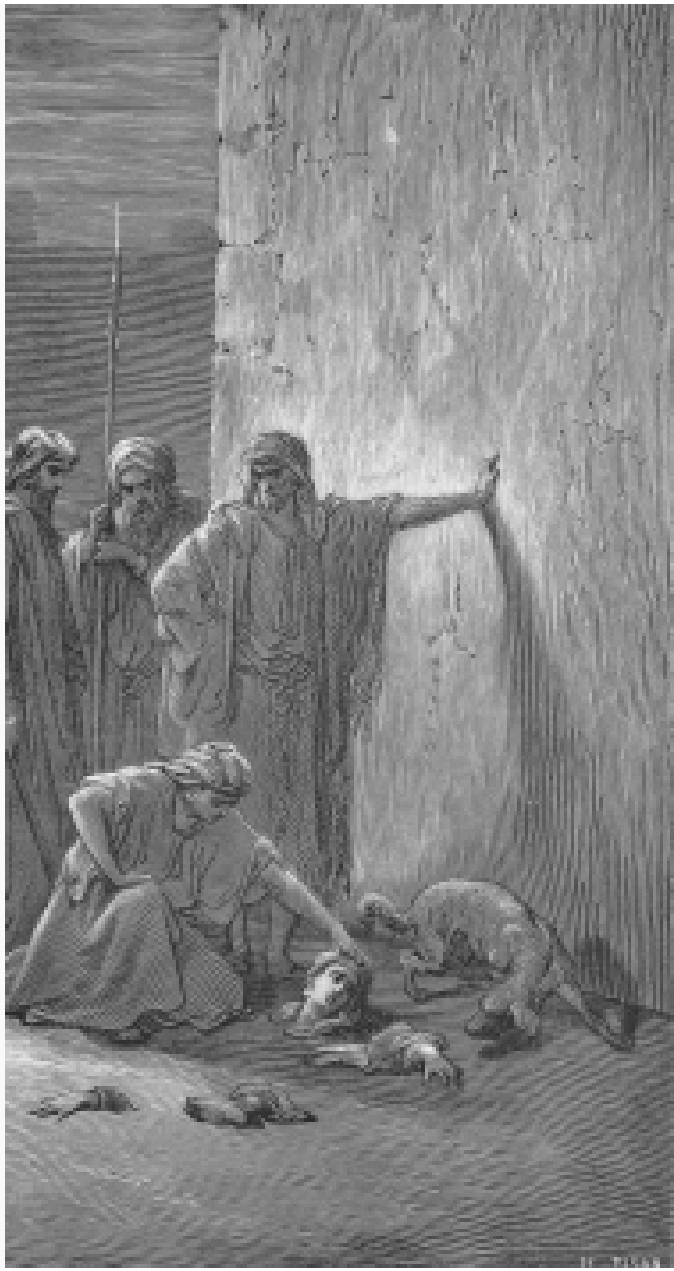
彼は中に入って食べたり飲んだりし*、それから言った。「あののろわれた女の世話をしてやれ。彼女を葬ってやれ。あれは王の娘*だから。」

彼らが彼女を葬りに行ってみると、彼女の頭蓋骨と両足と両手首しか残っていなかったので、帰って来てエフーにこのことを知らせた。

＊宮殿の真のあるじとしてのふるまい。

➡イスラエルの王として

＊アハブ王の妻　➡オムリ王の義理の娘



【イゼベルの最期】 II 列王記9:36～37

するとエフーは言った。「これは、【主】がそのしもべティシュベ人エリヤによって語られたことばのとおりだ。『イズレエルの地所で犬がイゼベルの肉を食らい、イゼベルの死体は、イズレエルの地所で畑の上にまかれた肥やしのようになり、だれもこれがイゼベルだと言えなくなる*。』」

＊最悪の結末を迎えたイゼベル。

■悪は、神の裁きによって、最期には、この地上に存在した痕跡すら、すべて消し去られる時が来る。

V. まとめと適用　罪と死の贖いの十字架を見上げよう

突き落としの崖からのイズレエル平原

【イゼベルに表された悪の本質】

■入念に化粧し、神の立てた王エフーを窓から見下ろしたイゼベル。
強烈な自己顕示。神への侮り、不信仰と傲慢の極み。
悔い改めどころか、命乞いもしない。
最期まで相手を見下し、呪う。➡究極の支配性。悪の極めつけ。

■苦境に立つほど闘争心が燃え上がり、心が折れることもない。
真の悪人は、平凡な罪人である私たちの意識を凌駕している。

■真の悪を前に恐怖し、震撼する、その感覚は当たり前のこと。
罪人は、悪人の前には、ただ無力さを痛感させられるしかない。

【この世にある真の悪】

■支配欲を満たすためには、嘘も殺傷も、手段を問わない者がいる。
殺人そのものに快感を覚える、快楽殺人者は、確かに存在する。

■独裁者が快楽殺人者を雇い入れ、時に恐怖の粛正部隊を組織する。
お互いが恐ろしい欲望を満たし合う、極悪なWIN－WINの関係性。

■むき出しの悪意を圧倒的な暴力をもって向けられたら、私たちは、
余りにも無力だ。イゼベルは、組織的に預言者たちを殺戮した。

【悪の支配する世で、希望はどこにある？】

■イゼベルによって、無残に殺されたおびただしい預言者たち。
どんな思いで、彼らは地上生涯の最期を迎えたのか。

■一人残されたエリヤの孤独と絶望は、どれほどのものだっただろう。
それを引き継いだエリシャの戦いは、どれほど苛烈だっただろう。

■死ですべてが終わるなら、地上に希望などない。
この世界には、あまりにも不条理で無残な死が満ち満ちている。

人の悪の極みを、すべて受け止められた方がいた。
まったくけがれなき、罪なき身にも関わらず、一切の抗弁もなく。

激しく鞭打たれ、骨が見えるほどにただれた体で、
肉に食い込む重い十字架を抱えて、引きまわされた。
人々に嘲られ、ののしられ、つばを吐きかけられながら。

神の子を嘲った、不信仰と傲慢は、わたし自身の姿に他ならない。

十字架の上で、主イエスは叫ばれた。

「父よ、彼らをお赦しください。
彼らは、自分が何をしているのか　分かっていないのです。」

私の受けるべき神の怒りの杯を、主イエスが飲み干された。

預言者エゼキエルは、神の究極の救いについて告げている。

「わたしは悪しき者の死を喜ぶだろうか
―【神】である主のことば―。
彼がその生き方から立ち返って生きることを喜ばないだろうか。」

エゼキエル書18:23

主イエスは死んで、墓に葬られた。神の子が死んだ。
究極の辱めを受けられた。

しかし、主イエスは、死を打ち破ってよみの底からよみがえられた。
栄光の姿で、弟子たちの前に立たれ、主に従い通せなかった
弟子たちの罪をゆるし、永遠の和解を結ばれた。

聖霊を注がれた弟子たちによって、この福音は告げ知らされた。
ただ信じて、私たちは、滅びに至る神の怒りから救われた。

主イエスは死んで、墓に葬られた。神の子が死んだ。
究極の辱めを受けられた。

しかし、主イエスは、死を打ち破ってよみの底からよみがえられた。
栄光の姿で、弟子たちの前に立たれ、主に従い通せなかった
弟子たちの罪をゆるし、永遠の和解を結ばれた。

聖霊を注がれた弟子たちによって、この福音は告げ知らされた。
ただ信じて、私たちは、滅びに至る神の怒りから救われた。

世の終わり、主イエスは、福音を信じたすべての者を
御許に挙げられる。

七年間の空前絶後の災厄による裁きの大患難時代に、
かつてないほどの人々が、福音を信じて救われる。
史上類をみない患難の末に、イスラエルは民族的回心に導かれる。

そして、主イエスは、栄光の王として帰って来られる。
すべての聖徒たちと共に、この地を永遠の平安に治めるために。

あなたもそこにいたのか

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪を贖うために十字架で死に、

②墓に葬られ、

③三日目に復活したこと、を信じます。

そうです。主よ、あなたがあざけられ、ののしられていたそこに

わたしもいました。

主よ。あなたが叫ばれたのは、滅びゆくわたしの救いのためです。

どうか、主よ来て、この世界と人々を神の怒りから救ってください。

ホサナ。主よ救い出したまえ。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。　アーメン」